

庭の番人ゝあきゝ

## 彩り・別れ

土橋 光子

青葉の季節が終わり、ちょっとひんやりした風と、おいしい空気を楽しめる日が多くなってきました。あんなに沢山の汗をふき出させていた暑い日は、遠い昔のような気がします。

濃い緑の葉が重なり合うようにして枝を埋めつくし、そこで、一緒に遊んでいた緑の風

はどこへ消えたのでしょうか、もしかしたら地球のどこか、彼等を待っているところへ引越したのかもしれませんが。

その後へ、落葉樹の葉を染めるために、沢山の色を背負った花・青・素・爺さんに乗せて北風の車がやってきました。遠い昔、私の学生時代に、化学変化の様子を童話にして教えてく

ださった恩師を懐かしく思い出します。

「北風が吹きはじめる頃の寒く冷たい夜に、カセイソ爺さんがやってきて、一本一本の木に登り下りしながら、丁寧に葉っぱの色を塗り変えていくのです。」と、その季節がきますと、この夢のように美しい化学変化の様子を子どもたちに語り聞かせたくなります。落葉樹の桜・海棠・花水木・柿・梅・石榴・榎等が小さい庭で、常緑樹たちと共に各々居場所を得て立っています。毎年このお爺さんのお世話になる様子を見て廻るのも楽しみのひとつです。一枚の葉でも葉肉の薄い辺から変色していくようです。花水木は花も葉も実も見事な彩のシヨウを見せてくれます。桜は見事な花でした。葉もよく繁り、紅葉のときはさぞやと期待したのですが、大木になり過ぎて、近くではパツとしません。この頃から日課の落ち葉掃きが忙しくなりはじ

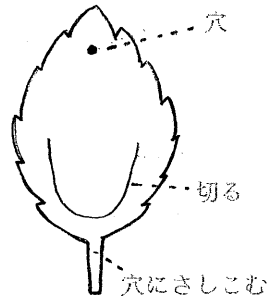
めます。せめて向こう三軒両隣ぐらいの道はと、4 m幅の道路を往ったり来たりしていますと、朝露にぬれ、陽の光の中で輝いている一枚の落ち葉を見ました。「きれい！」と声にならない思いは掃く手を止め、片寄せた葉の前に屈みこんでいました。そっと拾い上げて陽にかざして見ますと、原色から中間色まで、虹のもつ色を全て見せてくれます。

落ち葉の季節は、四月の浮き立つような華やきはありませんが、十月の半ばを過ぎる頃から葉は散りはじめます。後には裸木が残り、寒い日がすぐぎますよと木枯らしが泣きだてるだけです。朝はめっきり冷たくなりました。竹箒の柄が手の平に吸い付くような気がします。風に誘われて散り急いだ沢山の葉の中に、実に見事な色に着飾ったものがあります。手にとった一枚で草履を作ってみました。誰が履くのでしょうか。一足、二足と大

## 履 草 の ぱ っ 葉



でき上がり



きさや色をあわせて作りためていきますと、  
「あつ！ おばあちゃんおはよう、なにしているの！」「あら、おはよう！」と作り立ての品物を見せますと、「わあ、かわいい、ほしいほしい！」「わたしにも、」「わたしにも！」と三人三様の抑揚を言葉にこめて、立

ち止まりました。あわてて側溝のふちに並べ  
て見ますと、各々が手にとって、「きれいな  
ぞうり！」後から追いついてきた子たちも、  
「わたしのも作って！」さあ掃くところで  
はありません。草履屋さんは大忙しです。お  
くれてきた子は集められた葉の中から、気  
入った葉を捜して小刻みに足ぶみをしていま  
す。待ちきれなくなったのか「私自分で作  
る、おしえて！」「はい、じゃ私と一緒に  
作って見てね！」片方が出来上がると「あり  
がとう！」「片方だけで？」「私も一つでい  
い」自分で作りはじめた子がいたので、最後  
の子には、「はい、両方で一足！」と渡して  
やりますと、「ありがとう、今度、自分で作  
る、あした教えて！」と、思い思いの言葉を  
残して学校へ向かって出発です。「気をつけ  
てね、後で作ってここに置いときます！」虫  
くい穴や、ほくろがなく、形と色のよいのを

二枚一組に揃えて集めると縁側に置き、家事を済ませて再び草履作りです。人数より、一、二足余分に作り、はこべの敷物の上に並べていますと、通りがかりのおじさん方が横眼で見てニヤリ！ 夕方犬の散歩に通る坂下の奥さんが「何をおつくりですか？」「いたずら、子どもたちと約束したものですから……」翌朝少しわくわくして、はこべの敷物のところを一番に見ますと、作品は全部売り切れていました。

此のような毎日が桜の葉の散る間続きます。美しく紅葉した葉っぱなら、どの木の葉でもいいのではと、真紅になって散った花水木の葉で作ったのですが、薄く柔らかで、形も円に近く思うようではありません。少し堅くて楕円形の桜の葉は、鼻緒もしっかり立ってほんとに履きよさそうです。残り少なくなった落ち葉を掃き集めていた数日後の朝で

した。「お早うございます。何時も子どもがお世話になりました！」と挨拶をいただき、吃驚して手を休めますと、皆の後の方からそっと覗いて最後まで待ち、貰うとワツと走っていく一番小さい女の子が、母親の後ろに半分かくれる様に立っています。「お早うございます。私の方が遊んでもらっているのですよ！」と笑いますと、「家ではよく話すんですよ、おばあちゃんに教えて貰ったのなんて言って、自分で拾ってきた葉で私に作り方を教えるのです。」「あらあら、じゃお母様も草履屋さんになれますね！」「はい！どうぞいろいろ教えてやって下さい！」この子は待つ間に、いくつも作るのを見ていて覚えていったのでしょう。でも私が作ったのもほしいのです。小さい声で「学校の先生にも教えたの、学校にも桜があるの！」話がはずみます。この子の話が散った葉っぱたちにも

聞こえたらいいなとおもいました。

数日後、梢に一、二枚ずつ残っていた葉が夕日に染まって西風にゆられていました。明日はお別れになるかもしれません。遠くへ旅立ってしまうでしょう。翌日は大変冷たく寒い朝でした。少し早起きし、外に出て空を見上げますと梢は空っぽ、ゆれていた残りの葉は青木の垣根の上で最後の彩りを見せてくれました。葉っぱたちは子どもと沢山遊んで、土の母さんのところへ帰ったのでしょう。

さよならをしたので、同じ葉には会えないけれど、新しい生命を貰って生まれてくる

葉っぱと、子どもたちに、又来年あいましよう！

(元・武蔵野相愛幼稚園)



※ 7月号43頁上段14行“自分に触る”は“自分に解かる”です。お詫びして訂正いたします。(編集部)